

山本 昌一(国士館大)
横堀 利明(都立北園高)
芳澤 隆(駒場東邦高)
吉田 茂(本庄高等学院)

編集

岩淵 匡
瓜生 鐵二
田島 伸夫
内藤 哲彦
中村 献作
古井 純士
柳瀬喜代志

事務局

岩崎 淳
桑山 俊彦(庶務)
津本 信博(総務)
野村 敏夫
福田実枝子
町田 守弘
松本 直樹(会計)
吉田 茂

編集後記

六月九日(木)の皇太子・皇太子妃の婚礼の儀の当日は、梅雨の合間の休日となり、五月の連休以降の連戦で、少しバテ気味になっていた体には良い休養となった。

たまたま饗庭孝男著『文学としての俳句』(小沢書店)を読んでいたら

慟哭せしは昔となりぬ明治節

虚子

の一句に目が留まった。この句は「秋風や心の中の幾山河」「仲秋や月明かに人老いし」「大いなるものが過ぎゆく野分かな」の三句と並べて掲出されているが、それぞれの制作年代はまちまちで、「慟哭せし」の句は『五百句』によると、昭和六年の作だと分る。明治天皇崩御の年から数えて二〇年目に作られた句であり、他の三句と併せて虚子の「時間」意識を考察するに足る作品となっている。

虚子はまた、

去年今年貫く棒の如きもの

という著名な一句も残している。

彼には「明治節」を想起して「慟哭せしは昔となりぬ」との感慨を漏らしながら、明治という時代が自己の血脈の中に連綿と生きていることを意識している一面がある。「時間」を「貫く棒の如きもの」として捉える連続的な意識の働きがある。

そんなことを考えながら、

- (1) 皇天皇土菊句はざる處なし 漱石
- (2) 伏して哭す民草に酷暑きはまりぬ 井泉水
- (3) 日盛りの町ひそと不時の国旗垂る 〃
- (4) 夕立鳴るその夕べ改元觸れさせらる 〃
- (5) みたまうつしの御頃か三日の月出でぬ 〃
- (6) 儀杖肅々と盡きざるも盡きし星月夜 〃
- (7) 憂ひ市民に過ぎしや菊を競ふ事 〃
- (8) 先帝を追慕す菊の奴かな 虚子

等の句を思い浮かべてみた。
(1)は岩波版『漱石全集』には「後天後土」の表記で掲載されているが、加藤犀水編の句集『白人集』(昭和九年刊)には(1)の表記で掲載されている。漱石はこの句をロンドン留学中の明治三四

年十一月三日（天長節の日の夜）に作り、巴里在住の画家文化人（和田英作、浅井忠、中村不折、勝田主計他）のサロン「巴会」に送っている。そもそも『白人集』とは伯林の「伯」を分字して命名したもの。そこで育った句会・白人会（同人巖谷小波、美濃部達吉他）のアンソロジーに巴里の「巴会」への投稿句も併録したのであった。

漱石は異国の空を仰ぎながら、故郷日本を偲び、菊香子季節天皇の御威光が那辺にも行き渡っている思いを強くしたのであらう。『こころ』の中でキーワード「明治の精神」ということばを考える際、漱石のこういった皇室敬仰・讃美の一句は念頭に置くに値する。

明治元年生まれの漱石の一句に次ぐ、明治一七年生まれの井泉水の六句（2）（7）のうち、（2）（4）までの三句は、明治天皇崩御の悲報が国中を駆けぬけた明治四年七月三〇日当日の国民の悲しみを詠んだもの。「先生」の次の世代を荷う若者「私」の目撃した当日の国民の姿や町の様子、天候等が写し出されている。（5）（6）の二句は大正元年九月一日三日の大葬の日の光景を詠んだもの。

「御霊遷」とは天皇の霊を御霊屋に移す儀式のこと。「盡きざるもの盡きし」は数え切れない星数であっても、星数が定まっているように、人間の命数、時代の命数が定まったことを述べている。

（7）の句は「明治帝崩御のことも人々の口に上らなくなり、世間をもつぱら菊の花でもちつきりである。人々は悲しみにも慣れ、普段の生活を取り戻したようだ」（藤本一幸）の意である。（8）の虚子の句は大正四年の作であるが、比較対照してみると面白い。

あるいは中村草田男の「降る雪や明治は遠くなりけり」の一句と較べることも出来る。

折柄、本年三月、停年退職なさった紅野敏郎先生の著書『貫く棒の如きもの』（朝日書林）が刊行された。近代文学研究に志す者、国語教育に携る者にとつて、この表題は非常に意義深いものがある。そこに研究者、教育者としての大いなる意志が読み取れると同時に、先生の研究姿勢、教育姿勢をも読み取ってしまうからである。

作品における「時間」の把握の仕方から、研究者・教育者としての「時間」の問題にまで波及してしまつたが、「貫く棒」の如き堅固な生き方は、矢張り自己を甘やかさない厳しい自己との対決を避けて通れない気がする。

昭和二〇年八月一日、昭和六四年一月七日という時代の節目を経て五〇台に突入しようとしている今、こうしたことが日常生活の追及課題となっている。（瓜生鐵二）

早稲田大学国語教育研究 第十三集

一九九三年六月一日 発行

発行所 早稲田大学国語教育学会

代表 興 津 要

東京都新宿区西早稲田一六六一

早稲田大学教育学部内

振替東京六一八五二七番

印刷所 (株)ワセダ・ユー・ビー

東京都新宿区西早稲田一七一七